

探訪 北の風景 105

毛綱毅曠氏の代表的な建築物・市立博物館 釧路市

萩本和之

釧路市にいくつか斬新なデザイン建築物がある。いずれも設計したのは地元出身の建築家・毛綱毅曠氏（1941〜2001）。大半が1980（昭和55）年代に建築されたものながら、いまでも新鮮な「ポスト・モダン」の輝きを失っていない。その記念碑的な建築物が埋蔵文化財調査センターを併設した釧路市立博物館。80年にラムサール条約登録第一号となった釧路湿原をはじめ、釧路の自然や歴史、産業、アイヌ文化について学び、研究できる拠点。天然記念物・ヒブナで有名な春採湖をバックに、外観は毛綱氏が「金の鳥が羽をひろげ、卵を抱いている姿」から発想して、

国の特別天然記念物・タンチョウがのびのびと両翼を広げた様子を設計したそう。ドームを中央に配し楕円状を積み重ねたもので、鉄骨鉄筋コンクリート造り。地下1階、一部4階建て延べ5275平方メートルで、83（同58）年に完成。日本建築学会賞に輝いている。

大胆な楕円の形状が特徴なだけに当時、博物館学芸員だった新庄久志さんは「効率的な収蔵ができないのでは」と戸惑ったそう。しかし発想転換して、約16万点の収蔵点数のうち、4、100点を3層（釧路の自然、歴史、サコロベの人びとⅡアイヌ民族の英雄叙事詩）に分けて、DNAを模したような2つのらせん階段を上手く活用して展示。その結果、当時の通産大臣デイスブレイ産業大賞を受賞した。

湿原は67年（同42）年に国の天然記念物となり、87（同62）年国立公園となったが、釧路には昔からタンチョウをはじめ、珍しいキタサンショウウオ、イジマルリボシヤンマ、イトウなどの在野の研究者もいて、それらの成果も博物館に披露されている。93（平成5）年にはアジア初のラムサール条約締結国会議を開催しているの、来年度で開催30年となる。同館学芸主幹の石川孝織さんは「新年度には記念講演会や観察会などを予定している。若い学芸員らも先人の労苦をリスペクトしつつ、基幹産業の石炭や製紙などが衰退、撤



アイヌの人々が「湿原の神」と呼んでいる特別天然記念物・タンチョウ。国立釧路湿原公園で優雅な舞を披露するが、博物館では4階に剥製が飾られており、観覧者の人気を集めている

退する中で産業コーナーの充実や北海道遺産の簡易軌道、鉄道の展示にも努めている」と抱負を語り、開かれた館として出前講座なども企画している。同館を訪れた11月12日にも市立釧路総合病院内の保育園児約15人が見学に訪れていた。

湿原西端に同じく日本建築学会賞に選ばれた市立釧路湿原展望台資料館がある。「風水術の天脈と地脈が交合したカオスにある『湿原の種子』Ⅱヤチボウズのイメージ」というもので、84（昭和59）年に完成している。

また反機能性を極端に追及した、といわれる「反住器」は市内富士見の住宅街にひっそりと建つ白い立方体。72年（同47）年に毛綱氏の母親のために建てたもので、本体は1辺が8メートル、部屋は





左翼に収蔵庫、右翼に展示室、中央に動線が整理され、エントランスの吹き抜けには巨大なマンモスの標本が置かれる釧路市立博物館。春採湖をバックに春採台地に建っており、3層に分かれて展示され、DNAを模した2重らせん階段が結んでいる

わが国最大の湿原・釧路湿原を一望できるのが1984年（昭和59年）にオープンした市湿原展望台資料館。毛綱氏は風水術をもとに形而上学的な「湿原の種子」Ⅱヤチボウズをイメージして、「原自然の記憶に回帰する場」と設計したという



住宅とはとうてい思えない「反住器」。毛綱氏の実母のために建てたそう、採光などを考慮しており、「住みやすい」と実母は喜んでいたりという。「奇才・毛綱毅曠あり」との名を一躍、建築界に知らしめたポスト・モダンの先駆け作品

4層家具1・7層の3つのキューブの入れ子構造。ほかに市内には博物館近くの市立幣舞中（旧市立東中）や道釧路湖陵高同窓会館をはじめ、商業施設・フィッシャーマンズワーフMOOや釧路キャッスルホテル、ふくしま医院、NTTDOC OMO釧路ビルがある。

道立釧路芸術館の井内佳津恵学芸主幹は「毛綱氏の作品は風土や歴史に根ざしており、今や毛綱建築なしには釧路のまちを語れないのでは。建物の空間一つひとつを市民の方と一緒に味わいたい」と、毛綱建築視察ツアーなどを企画している。

△はぎもと かずゆき・元札幌国際大学教授▽